

# 不 便 益 の 読 み 物

京都先端科学大学

川上 浩司

四月になり、この「不  
便  
益」の連載も二年目に突入しました。過去一年、不  
便  
だからこそ得られる益があるのだとい  
ことを、書き連ねてきました。今年度  
は、さらに厚みを増して書き進める所存  
です。よろしく願います。

四月と言えば、新年度の始まりです。  
学校では、新学年の真新しい教科書が配  
られていることでしょう。ここで、皆さ  
んの知り合いに中学校に入学したばかり  
の人がいれば、国語の教科書の表紙が鯨  
の背面跳びではないでしょうか。もしそ  
うなら、光村図書「国語1」です。単



20

元7「価値を見いだす」を開いてみてく  
ださい。「不  
便」の価値を見つめ直すとい  
うタイトルで、中学生に不  
便  
益を説明  
し、これまでの常識とは異なる別の視点  
を持つことを勧めています。工学畑の人

間が理数系ではなく国語の教科書に文章  
を載せるというのは珍しいことのように  
です。過去二年、この教科書で学んだ中学  
生達が、新聞に不  
便  
益に関する考えを投  
稿したり、私にレポートを送ったりして  
くれました。

教科書には十ページほどしか書けな  
かったのですが、もっとしつかりと若者  
に不  
便  
益のことを知ってもらえるのが、  
岩波ジュニア新書『不  
便  
益のススメ』新  
しいデザインを求めて（二〇一九年）  
です。この本は、若者に対して、不  
便  
であることを無条件に忌避するのではな  
く、不  
便  
だから得られる益もあることを  
前提に物事を考えてみよう、と呼びかけ  
るものです。書籍のタイトルには、デザ  
イン（新たなものごとを作り出す）とい  
う未来志向の言葉を選びましたが、その  
実は過去から現在にいたる物事を捉え直  
すことにも繋がる内容になっています。

ジュニア新書ですから、小難しい専門用  
語にはすべて説明をつけ、わかりやすい  
ことを旨としました。この本は、中学や  
高校の模試や入試の問題によく使っても  
らえます。出版から四年も経ちますが、  
未だに「使っているですか？」という問  
い合わせを、いただきます。

もともと不  
便  
益は若者限定の考えでは  
ありません。それどころか、高齢の方々  
から「うん、うん、そうだよね」と言っ  
てもらい、いわゆるX世代とかミレニア  
ム世代と呼ばれる人たちからは「常日  
頃、自分が考えていたことに『不  
便  
益』  
という名前をつけたのですね」と言っ  
てもらえる考えです。ただ、直接話ができ  
た人たちだけではなく多くの人に知って  
欲しく、『ごめんなさい、もしあなたが  
ちよつとでも行き詰まりを感じているな  
ら、不  
便  
をとりに入れてみてはどうです  
か？』不  
便  
益という発想（二〇一七年）

21

をミシマ社と作りインプレスから出版しました。やたらに長い書籍名からは、何かの啓蒙書のように見えます。つまり、物事を捉える視点という不利益の一つの側面がタイトルに込められています。

不利益には、もう一つの側面があります。それは、工学の研究であるという側面です。具体的には、今までに無い新しいものを開発・発想する時の指針です。なんだか急にわかりにくい話になりそうですが、次のエピソードが簡単に物語ってくれます。ある時、価値工学という分野で不利益の研究会が立ち上がりました。工学の中でも特に硬派で、「価値＝機能／コスト」などとカチッと定義する価値工学と、不利益は真逆を向いているように見えます。ところが、研究会のメンバーに山登りが好きな人がいて、不利益の話がぴったり合いました。「不便の益を得るための便利」という、よくわか

らない結論になったのですが、山登りを例にすると、以下ようになります。

山の頂上に立つことが目的なら、ヘリコプターで運んでもらうのが便利です。でもそれは、山登りの好きな人にとってはお興醒めです。本当の目的は、登ることそのものを楽しみ、頂上では達成感を得ることのはずです。そのためには、自分の足で登るといふ（ヘリコプターより）不便な方法が不可欠です。ただ、装備無くしての山登りは危険です。山登りで不便の益（達成感）を得るためには、「信頼できる装備」という便利が必要です。そして価値工学は、装備の高機能化という仕事で、不利益と協働するのです。価値工学の不利益研究会の成果は、近代科学社『不利益の実装』（二〇二〇年）で報告しています。ただ、エンジニア向けの内容で、それ以外の人にはとっつきにくい内容です。

同じく専門書というくくりで言えば、同じく近代科学社から『不利益』手間をかけるシステムのデザイン』（二〇一七年）を出版しました。不利益は工学における研究の一つという側面を持つと、先ほどお話ししましたが、不利益の研究チームが、日本学術振興会から研究費の助成を何度かいただいています。このチームは、様々な分野で活躍するメンバーからなり、各自の分野における不利益の研究を何年もかけて実施しました。そして、その時の研究成果を持ち寄ってまとめたのが、先の書籍です。研究者の書く文章ですから、論文調で堅苦しいのがほとんどですが、中にはわかりやすく優しい文章も混じっています。

最後に、不利益に関する最初の書籍を紹介します。まだ研究仲間がいなくて一人でコツコツと事例を集め、考察を加えて数年間、昔ながらの堅苦しい工学分野

では論文として発表することもままならず、ひたすら「不利益システム研究所」と名付けたウェブサイトに掲載するだけだった頃、化学同人の編集者に見つけてもらいました。出版したのが、不便から生まれるデザイン／工学に生かす常識を超えた発想』（二〇一一年）です。工学研究のアウトリーチのつもりで書きましたから、論文調で難解な内容が数百ページ続きます。出版されてすぐ書評をエゴサーチしたところ、見つけたのが「この読みづらさも不利益か？」です。はい。全て読みこなせた時に得る達成感たるや。

川上浩司（かわかみひろし）

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞、出版賞多数。著書に『不利益という発想』（二〇一七）など多数。